様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２１９９５

研究課題名（和文）ジャマイカ二言語使用教育プロジェクトー意思決定過程からの一考察

研究課題名（英文）A Bilingual Education Project in Jamaica: The Decision Making Process

研究代表者
源　邦彦（Minamoto, Kunihiko）

神奈川大学・外国語学部・助教

研究者番号：１０８７５５８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、研究テーマを数回にわたり変更することになったが、最終的には、(1)ヒューバート・デボニッシュによる言語計画、(2)教育省の言語計画、の2つの関連する研究調査を実施した。デボニッシュによる言語計画については、2022年2月から2024年2月まで合計5回の深層インタビューを実施し、十分なデータを収集できた。現在は5名の研究者からのレビューコメントをもとに論文を推敲中である。教育省の言語計画については、ジャマイカ語の地位を公的に認める政策案の意思決定過程に深く関与してきた教育省官僚3名に匿名インタビューを実施した。匿名であるため非公表のものも含め貴重なデータを入手できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、言語学の社会構築性に関する再検討を促し、言語学者がこれまで主張してきた記述主義の意味を再考する契機を提供することになる。言語学者が執り行う言語学的行為のイデオロギー性、政治性、恣意性を振り返ることで、言語学者自身が今後どのように社会貢献できるのかを再考する機会となってほしい。また、一般社会においても同様の再考を促したい。言語学者の科学的ディスコースへと昇華された一般社会の認識は、特定の集団のことばを差別的なカテゴリーへと分類することを合理化し、その結果、当該集団が自身の言語使用を根拠にいかに集団的な人権侵害や人種差別に苦しめられているかを考える機会を提供したい。

研究成果の概要（英文）：　The research, started in 2022, had to change its theme several times, but finally, it was conducted on: Hubert Devonish's language planning and Ministry of Education's language planning.
Regarding Devonish's language planning, I conducted three interviews from February 2022 to February 2023. I made a paper presentation on it in June 2023, but finding some flaws or inadequacies in the presentation, I conducted additional two interviews with him. I am currently working on a paper based on review comments from five linguists.
The Ministry of Education issued in 2022 a policy proposal on the status of English and Jamaican in education and beyond. For the purpose of investigating the policy-making process, I conducted anonymous interviews with three Ministry bureaucrats involved in the process. Because they were anonymous interviews, I obtained important data including unofficial or unpublished one.

研究分野：言語社会学、言語計画論、ブラックスタディーズ

キーワード：人種階層化された資本主義世界システム　資本主義的搾取、抑圧と科学　言語学、社会言語学と人種主義　言語学、社会言語学の社会学的再考　言語学、社会言語学の再構築　言語計画論の再構築

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ミシガン州立大学の博士課程では、アメリカのアフリカ人奴隷子孫の母語を英語とは異なるアフリカ系の言語（エボニクス）とみなす言語学研究、その母語にかかわる問題・政策についての研究に従事した博士課程在学中のプログラムで 2014 年にジャマイカのボランティア団体にインターンとして参加した際、アメリカにおけるエボニクスと英語との二言語使用教育を求める運動が、その 8 年後にジャマイカで起こった言語運動に大きく類似していることを見出し、博士号取得後の研究テーマとして意識するようになった。その運動はジャマイカのほぼ全国民の母語でもあるジャマイカ語（一般通称は「パトワ」「ジャマイカ・クレオール語」）を英語系クレオールではなく自立した固有言語と位置づけ、ジャマイカ語と英語との二言語使用教育を最終的には大学を含めた全教育段階で実行することを目指す壮大な試みであった。とくに、2004 年から 2008 年まで小学校で実施されたパイロットプログラムにおける教育省と西インド諸島大学モナ校ジャマイカ語課による意思決定過程を描き、なぜ今日のようにほぼ未実施の状態になっているのか、その問題点を明らかにしようとした。また、現地の小学生から高校生までの生徒・学生とフォーカスインタビューを行うことで教育言語として英語のみを課す現状が当人たちにとってどれだけの負担になっているのかを証明しようとした。最終的には、現在移民人口として増えつつある在日ジャマイカ人を筆頭に同様の問題を抱えるアフリカ系奴隷子孫や大陸アフリカ人の人権を保障することに貢献したいと考えていた。

２．研究の目的

当初は 2004 年から 2008 年のあいだに実験された二言語使用教育プログラム（BEP）の意思決定過程の中で特定の言語計画者（言語戦略家ヒューバート・セント・ローレント・デボニッシュ）がどのような役割を演じ、教育省側は誰がどのような議論を展開したのかを調査する予定であった。また、そのような二言語使用教育の必要性を証明するための質的調査として小学生から高校生までの数名にインタビューを実施する予定でいた。ところが、2020 年から 2022 年にかけてコロナ禍に入り現地への渡航が妨げられる中、基礎固めとして理論的研究に集中し、その結果研究の関心が教育言語政策そのものよりはむしろ、個人レベルにもかかわらず幅広く言語計画活動に携わり国家的な影響力を有するヒューバート・デボニッシュの言語計画、イデオロギー、社会思想に興味を持ち始めた。その結果、個人レベルの言語計画者・言語戦略家ヒューバート・デボニッシュによる言語計画行為の全体を、批判的言語社会学・社会言語学ならびに批判的人種理論の視座から体系的かつ包括的に再構築することへと目的が変化した。また、二言語使用教育プログラムの意思決定過程については、日本からの渡航禁止中に現地の大学院生が博士論文として執筆したことをデボニッシュ博士から知らされ、現在教育省がどのように二言語使用教育へと方向転換しつつあるのかをその意思決定過程を含めて研究することにテーマを変更した。

３．研究の方法

データとしては半構造化インタビュー、関係者の著作物、政策文書、議事録、政府実施調査データを収集する。言語学と人種主義、言語学と言語計画の関係性を批判的に再検討することで新たな言語計画パラダイムを構築し、そのパラダイムに基づいてヒューバート・デボニッシュの個人レベルの言語計画、教育省を中心とした政府による組織レベルの教育言語・言語教育計画を記述、分析する。

４．研究成果

(1)言語学者ヒューバート・デボニッシュ博士による個人レベルの言語計画と革命思想（2023 年 2 月～現在）

ヒューバート・デボニッシュ博士へは、1 回につき 1 時間半から 2 時間にわたるインタビューを実施した。インタビュー内容についてはほぼすべて質問を用意しそれに対して回答を求める完全に構造化されたインタビュー手法を採用した。その結果、学会発表や論文の作成に必要な情報を効率よく得ることができた。その一方で、ライフストーリーインタビューのようにほぼインタビューの入り口の大まかな質問以外は相手に対話を委ねる手法であれば、インタビュー相手の普段の対話では知りえない側面や、人生経験、政治思想や言語イデオロギーまでを知ることができた可能性はあるが、そのような情報が容易には得られない制約のある手法を今回は採用した。論文の一部がデボニッシュ博士の言語学研究や言語計画活動の背後にある経済政治思想やイデオロギーであるため、この点に関しては博士の著作ならびに博士の政治思想に最も大きな影響を及ぼした人物の著作を精読し、そこから抽出あるいは推論するか、場合によっては直接本人に質問する手段を採った。この点については、今後デボニッシュ博士と信頼関係を築き、彼の言語学者人生の総まとめとなる時期が来た時に、ほぼ構造化されていないライフストーリー

インタビューを実施し、博士の人生全般を含む、言語計画に身を捧げた生涯を描く著作を出版したいと考えている。

具体的な研究内容の公的な場での発表としては、まずは、2023 年 6 月に日本言語政策学会（JALP）第 25 回研究大会（2023 年 6 月 18 日）で発表を行った。論題は「ジャマイカ言語社会の社会主義「革命」―言語計画者ヒューバート・デボニッシュ博士の試み―」である。博士の言語計画の社会主義的革命性を伝えるものではなく、結果としては博士の活動全般を伝えるフォーカスの定まらない発表内容となった。その反省から、執筆中だった論文を再構成し、人種階層化された世界システム・国内の社会構造、人種階層化された言語学、博士の社会思想、博士の言語計画など、これらの関連性が見て取れるよう執筆を進めることにした。その流れで、2023 年 8 月から 2024 年 2 月まで合計 2 回の追加インタビューを実施した。また、必要に応じ、特に細部に関する質問については e-mail によって博士と質疑応答を何度も繰り返した。その結果、2024 年 3 月末までには論文のドラフトが完成し、その後 5 名の言語学者に査読を依頼し、査読コメントをもとに推敲を重ね、5 月下旬には学術雑誌への投稿を完了した。また、今後この論文が条件付きで採用された場合、内容を速やかに改善できるよう、2024 年 6 月に言語管理研究会で研究発表を行ったところである。

(2) ジャマイカ教育省による教育言語・言語教育政策＜Language Education Policy of 2022＞（2024 年 2 月～現在）

Language Education Policy of 2022 はすでに国会で可決された政策ではなく政策案の段階である。それは、英語の重要性を強調する点ではこれまでの国家の姿勢とは変わらないものではあったが、歴史上はじめてジャマイカ語（政策文では「ジャマイカ・クレオール語」を使用）の存在意義を公的に認めようとする画期的な側面もみられる。本研究テーマに関するフィールドワークとしては、Language Education Policy of 2022 の意思決定過程に直接参加し主要な役割を果たした教育省官僚 3 名に匿名のインタビューを実施した。インタビューは 1 回のみで所要時間は 90 分程度であった。かなり限られた時間であるため、事前に綿密に考案した質問集にしたがい効率よく情報を収集することを心掛け、インタビューの中で新たに存在することが分かった重要な公文書類も収集することができた。インタビューによって明らかになった点は、1)意思決定過程においてどのような関連組織を通過することで、つまりどのような側面で影響を受けることで政策決定に至るのかの具体的プロセス、2) Language Education Policy of 2022 の政策内容について各利害関係者・団体から意見を聴取し終わり、省内の意思決定過程が詰めの段階に来ていること（聴取した意見のデータはすべて入手済み）、3)若干の調整を加える場合があるが問題がなければこれから Language Education Policy of 2022 を国会で諮ること、4) Language Education Policy of 2022（2001 年に同様の政策案が存在）は以前国会で審議されたことがあるが可決されていないこと（2001 年の政策案も国会で否決）、など貴重な情報を得た。また匿名インタビューであったため未公開審議内容の一部も入手できた。

現在は、もう一方の研究テーマの論文を執筆中であるため、それが一段落し次第こちらの教育省による言語教育・教育言語政策の論文執筆にとりかかる予定である。現時点でこのテーマに関して論じられるフォーカスは、Language Education Policy of 2022 に関して各利害関係者・団体から収集した意見を整理、分析することで、英語とジャマイカ語への具体的な言語態度を抽出し、言語態度研究へと向かう予定である。国会審議で再び否決あるいは可決されようとも、その政策案を教育関係者がどのように受け止め、ジャマイカ語への受容度やその使用領域が今後どのように変わっていくかを議論したい。以上のようなフォーカスで、今後は、2025 年 3 月に開催される学会の全国大会で論文発表を行い、そこから得られたフィードバックをもとに今一度必要な情報を収集するため 2025 年 3 月に教育省の関係官僚への匿名インタビューを再度実施し、必要に応じて内閣の関係閣僚に対してもインタビューを実施する予定である。同年 4 月以降は教育関係者の言語態度に関する論文を発表し、その後は、教育省から関係省庁、国会審議へと至る Language Education Policy of 2022 の意思決定過程プロセス全体について同年 6 月に学会で発表し、2026 年 3 月ごろまでには論文として発表したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 源邦彦	４．巻 63
２．論文標題 米国アフリカ人奴隷子孫の母語に関する主流派言語学ディスコースー継承と挑戦	５．発行年 2023年
３．雑誌名 玉川大学文学部紀要『論叢』	６．最初と最後の頁 61，79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15045/00001780	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 源邦彦	４．巻 62
２．論文標題 社会言語学の再構築に向けて ―「人種」の主要概念化―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『論叢』玉川大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 69，91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 源邦彦	４．巻 4
２．論文標題 人種主義的世界システムにみる言語諸科学の「共犯性」―「ネイティブ―ノンネイティブ」パラダイム	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋大学文学部国際文化コミュニケーション学科紀要「国際文化コミュニケーション研究」	６．最初と最後の頁 101-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 源邦彦
２．発表標題 「社会」言語学と英語支配ー構造機能主義の批判的考察
３．学会等名 一般社団法人グローバル・ビジネスコミュニケーション協会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 源邦彦
２．発表標題 多文化共生社会における大学英語教育～人種概念の再検討～
３．学会等名 東洋大学人間科学総合研究所主催　研究チーム「大学の外国語教育の現状と未来―異文化理解と外国語教育―」公開研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 源邦彦
２．発表標題 科学的知識の構築と人種主義 ～米国アフリカ系奴隷子孫のことば～
３．学会等名 一般社団法人　グローバル・ビジネスコミュニケーション協会研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 源邦彦
２．発表標題 ジャマイカ言語社会の社会主義「革命」―言語計画者ヒューバート・デボニッシュ博士の試み―
３．学会等名 日本言語政策学会（JALP）第25回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 源邦彦
２．発表標題 言語戦略家ヒューバート・デボニッシュ―ジャマイカにおける征服ダイグロシアの脱構築
３．学会等名 言語管理研究会（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関